2

マイルドメイ夫人の医学的貢献
── 16世紀・17世紀イギリスの家庭の医学──

遠藤　花子
実践女子大学

イギリスでは，16世紀頃から家庭における医学が顕著なものとなってきた．家庭の医学というと，母から娘へと伝承されるものであると考えられていたが，女性たちは，階級を問わず，家族の病気を始め，近所の病気の人々の看病や世話，薬草の調合などを担うことが求められるなど，必然的に医学に従事していた．そのため，貧乏な女性でさえも，自分たちの治療技術を収入源にするなど，積極的に医療に携わっていた．

特に，読み書きを学んだ富裕層の女性たちは，病気治療を行うだけでなく，自ら医学や薬学の文献を読み，実験や研究をも行っていた．彼女たちが書き残した治療方法や薬草の煎じ方などの記録は，レシピ（receipt book）と呼ばれ，この当時の医術を知る貴重な財産となっている．このような女性たちはイギリス各地で散見されている．例えば，Margaret Hoby や Elizabeth Isham，Anne Halkett，Lucy Hutchinson，あるいは貧血の治療に鋼鉄の錆を使う治療法を提唱している Mary Doggett などが挙げられる．

この中でも特にマイルドメイ夫人 Lady Grace Mildmay（1552–1620）の患者の症状や治療方法，薬に関する詳しい広範囲に渡る記述は群を抜いている．彼女は68歳の死の年まで，薬草関連書物，書状，4つの手帳（それぞれ解剖学，薬草と薬の種類，薬の調合方法，治療方法），その他製本されていない2000枚ほどの処方箋や観察記録を残したと言われている．本稿では，このようなマイルドメイ夫人の医学的貢献に焦点を当て，彼女がいかに医学者として優れていたかを検証したい．

マイルドメイ夫人の医療の基本方針は，当時の医学界が最も重要視していたガレノスの説に基づいていたが，実際にはガレノスだけでなく，パラケルススや外科学，錬金術，占星術に至るまで，様々な文献を幅広く研究した．彼女はガレノスの4体液論や薬草に関する論を重んじつつも，パラケルススが奨励した金属や鉱物による治療など，自身の研究に化学的治療法も多く取り入れていた．

マイルドメイ夫人の家の台所には，蒸留器具，大きな調合用容器，薬をねかせておくためのスペースなどがあり，薬草，種実類，香辛料，樹脂，花などを材料としてよく使用していたことが分かっている．現に，マイルドメイ夫人の高級鎮痛剤（‘precious balm’）の材料は，24種類の根，68種類の薬草，14種類の種，12種類の花，10種類の香辛料，20種類の樹脂，1リットルの酢，9リットルのオリーブオイル，2,7キログラムの砂糖が使われている．また，彼女のレシピには，金，硫黄，水銀，スズ，アンチモン，ヒ素，鉛，琥珀，真珠，サンゴ，ベゾアール，テレペンチン，硝酸などの使用が記されている他，ヘラジカの蹄や雄鹿の角，蟹のハサミ，鳥など，動物を材料として薬を調合していたことも書かれている．

マイルドメイ夫人が治療した病気は，手記の中から抜粋して挙げると，てんかん，麻痺，脳卒中，黄疸，痛風，出血，弱視，天然痘，腹部の病気，皮膚病，痙攣，潰瘍，発熱，梅毒，精神病など，地域の人々がかかり得るありとあらゆる病名が記載されている．この当時の女性の医学というと，産婆としての活動が一般的であったが，産婆にとどまらず，膨大な種類の病気治療に対応した彼女の功績は計り知れない．

マイルドメイ夫人は，大学出の医者でも免許を持つ医者でもなかったが，この当時の医学に関する知識の最前線にいたのは確かである．17世紀初頭の医者たちが化学を基盤とする新しい医学や梅毒などの新しい病気に立ち向かおうとしている時，一人の主婦が逸速く病気の治療法に取り組み，記録を残し，医学界に影響を与えたことは注目に値する．